

戦略的創造研究推進事業

(社会技術研究開発)

平成28年度研究開発実施報告書

「持続可能な多世代共創社会のデザイン」
研究開発領域

研究開発プロジェクト

「農山漁村共同アトリエ群による産業の再構築
と多彩な生活景の醸成」

研究代表者 大沼 正寛
東北工業大学大学院 教授

目次

1. 研究開発プロジェクト名	2
2. 研究開発実施の要約	2
2 - 1. 研究開発目標.....	2
2 - 2. 実施項目・内容.....	2
2 - 3. 主な結果.....	2
3. 研究開発実施の具体的内容	3
3 - 1. 研究開発目標.....	3
3 - 2. ロジックモデル.....	7
3 - 3. 実施方法・実施内容.....	8
3 - 4. 研究開発結果・成果.....	9
3 - 5. 会議等の活動.....	21
4. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況	22
5. 研究開発実施体制	22
6. 研究開発実施者	24
7. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など	26
7 - 1. ワークショップ等.....	26
7 - 2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など.....	26
7 - 3. 論文発表.....	26
7 - 4. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）.....	27
7 - 5. 新聞報道・投稿、受賞等.....	27
7 - 6. 知財出願.....	27

1. 研究開発プロジェクト名

農山漁村共同アトリエ群による産業の再構築と多彩な生活景の醸成

2. 研究開発実施の要約

農林水産・鉱工業・建築・アートなど、地域の素材や環境・文化を活かし、主に身体的技能を通して価値を生み出す生業の現場を「共同アトリエ」とよび、特に注目すべき伝統的または先導的もしくは萌芽的な取り組みの運営・育成を図るとともに、その内実やプロセスから多世代共創のモデルを抽出・記述する。また、各地の多様な事例をつなぐネットワークを形成することにより、新たな資源の組合せや技術継承の可能性を探る。こうしたことによって、共創の営みと地域資源が織りなす生活景が、多彩に醸成されていくことを目指す。「この地に技ありプロジェクト」と通称し、持続性ある研究開発を進めていく。

2 - 1. 研究開発目標

本プロジェクトでは、地域資源を現代的な観点から見直し、持続可能な地域を支える産業として再構築することを目指す。本プロジェクトは、以下の3点を目標とする。

- a) 地域産業の再構築に資する農山漁村共同アトリエ (CA: Co-atelier) のデータベース開発と参照ツールの普及
- b) 生活景の醸成 (LS: Life-scape Maturing) をめざした農山漁村CA事例の創出実践とマネジメント体制確立
- c) 分散ネットワーク型地域産業と生活景の醸成をめざす地域産業デザイン論の検討と還元・発信

2 - 2. 実施項目・内容

- ①-1 東北地方を中心とした各地のCA/LSの多様な事例に関するデータベースの構築
- 2 CA/LS比較事例の視察調査と生活景醸成をめざす共同アトリエのモデル提示
- 3 季刊コアトリエ+Blog(WEB)による活動の記録と発信
- ② スレート、柔和材、保存食品など特定CA/LS事例における多世代共創の実践
- ③ 文化遺産と生活景、CA事業運営形態、景観デザイン等に関する多角的調査研究
- ④ 多彩なCAのネットワーク化と公開サミット
- ⑤ 課題解決ワークショップとCA/LSの理論化
- ⑥ まとめと発信

2 - 3. 主な結果

初年度半年間は、多様な事例に関するデータベースの基盤情報を構築すると同時に (①-1)、LSをめざすCAのモデルとなる特定事例の選定に至り (①-2)、プロジェクト限定のBlogでの記録・整理、季刊コアトリエ創刊号の発行に漕ぎ着けた (①-3)。

その結果、スレート/柔和材/保存食品を特定CA/LS事例とし、次年度より本格化することとなった (②)。また、これらを比較・連関するための多角的調査研究の方向を見定めるに至った (③)。

3. 研究開発実施の具体的内容

3 - 1. 研究開発目標

全国各地の農山漁村は、新たな動きも散在するものの、大局的には衰退し、人口流出が進んでいる。だがその内実は多様で、かつては地域資源に根ざした近代産業が隆盛した時期もあった。複合的で自律的な地域の生業・生活像を描き、実現させる必要がある。とくに、東日本大震災からの復興を目指す東北地方には多くの事例があるが、地場産品の需要は大幅に減り、日々の暮らしの風景（生活景）から地域らしさが失われつつある。

本研究開発プロジェクトは、地域資源を現代的な観点から見直し、持続可能な地域を支える産業として再構築するための端緒を見出し、具体例を通して実践・検討することを目標とする。農林水産・鉱工業・建築・アートなど、地域の素材や環境・文化を活かし、主に身体的技能を通して価値を生み出す生業の現場を「共同アトリエ（CA: Co-atelier）」とよび、特に注目すべき伝統的または先導的もしくは萌芽的な取組みの運営・育成を図るとともに、その内実やプロセスから多世代共創のモデルを抽出・記述していく。

また、各地の多様な事例をつなぐネットワークを形成することにより、新たな資源の組合せや技術継承の可能性を探る。こうしたことによって、共創の営みと地域資源が織りなす生活景が、多彩に醸成されていくこと（生活景の醸成，LS: Life-scape Maturing）を目指す。この目標をより具体化すると、以下の3点を挙げることができる。

1点目は、CAデータベース（DB）の開発である。地場産未利用材の活用から若者のコミュニティビジネスまで、様々な取組みをひろく収集・参照できるようにする。このとき、共創の対象や運営状況、人的体制や世代構成、立地環境や景観といった情報をカルテ化し、多極的に利用できるシステムをめざす。とくに、ネットワーク化に活かすことをめざしたツール（WEB、紙媒体等）を作成し、CA群の現場や周辺地域住民における相互理解をはかる。

2点目は、生活景の醸成（LS）事例の運営・育成実践とマネジメント体制確立である。とくに、陸前地方における天然スレート建築群の広域保全と関連産業の育成をはかる「スレート千軒講／スレートアカデミー」を特定事例と位置づけ、課題解決を実践する。ここで得られる知見は、文化財の公的保存から景観まちづくりまで、LSをめざす取組み・主体の養成に関するモデルの開発に資するであろうし、CA群にとっては、商業的成功に留まらない公益的目標としてLSを位置づける気運にもつながると考えられる。

3点目は、LSに鑑みながら分散ネットワーク型の地域産業を形成する地域産業デザイン論の検討と還元・発信である。上記2点をもとに多角的・複眼的な検討をすすめ、CAの創出・活性化にかかるインセンティブやプロセス、コミュニティ形成やネットワーク化にかかる連関システムを明らかにし、散在するCA群が分散ネットワーク型の地域産業を形成できるか否か、可能性と課題を検討する。同時に、LSをめざす観点から歴史地理・現象学・建築学的な検討を行い、CA群からLSへ至る文脈やLSの価値化に関する知見を導出する。

（1）全体目標およびリサーチ・クエスチョン

本研究開発プロジェクト全体の目標は、地域に根ざした多世代共創による小さな

生業場^{なりおいば}が創出・育成され、それらが群をなしてゆるやかな地域産業を形成し、大量消費社会から持続可能な地域社会へのソフトランディングにつながることにある。このため、以下6点のRQを掲げる。

- ① RQ1) 地域の素材や環境を活かし、主に身体的技能を通して価値を生み出す生業場は、東北をはじめとする農山漁村に遺産として散在しており、資源としても未だ再生の余地を保持しているのではないかと？（多様な産業遺産の再評価と生業場としての再生可能性）
- ② RQ2) 地域の素材や環境を活かし、主に身体的技能を通して価値を生み出す生業場は、孤独な個人でも大企業でもない中小規模の共創の場（共同アトリエ＝CA）において形成可能であり、そのようなCAにおいては、伝統的な技能とエコロジカルな現代的感性が集う「多世代共創」が成立しているのではないかと？（CAの意義と多世代共創状況）
- ③ RQ3) 地域の素材や環境を活かし、主に身体的技能を通して価値を生み出すCAの構成員は、専門の製造労働者ではなく、しばしば1次・2次系の生業を複合的に営むマルチクリエイターであり、彼らは経済的成功のみならずライフワークとしての充実をめざしているのではないかと？（地域に根ざしたマルチクリエイター像）
- ④ RQ4) 地域の素材や環境を活かし、主に身体的技能を通して価値を生み出す多世代CAの活動目標は、経済的成功のみならず、地域の価値を向上させ美しい生活景を創出・醸成させること（生活景＝LSの醸成）にあり、それは結果として現状の景観保全に寄与しているのではないかと？（CAがめざす生活景醸成＝LSの意義）
- ⑤ RQ5) 地域の素材や環境を活かし、主に身体的技能を通して価値を生み出すCAが、地域内外において群をなし、相互にコミュニティやネットワークを形成することにより、分散ネットワーク型の新たな地域産業が形成できるのではないかと？（分散ネットワーク型の地域産業デザイン）
- ⑥ RQ6) LSをめざすCA群による地域産業形成モデルは、その得失、課題および多世代共創との整合性をどのように記述でき、地域現代史においてどのような意義を示すことができるだろうか？（小さな多世代共創による地域産業形成モデルと多世代共創の意義）。

（2）今年度の目標

○ 共同アトリエ（CA）／生活景醸成（LS）エリア候補群のデータベース構築

a) CAデータベースについて

既往研究を下地に、実施者・協力者から基本情報を集め、データベース（DB）ソフトを活用して合理的な入力・検索が行えるシステム開発を行う。レコード数は100件以上を

めざす。

b) LSデータベースについて

既存のデータベースを増強しながらのスレート民家情報を中心にDB構築を行う。あわせて、東北7県の重要景観区域を全体把握し、次年度にかけて情報収集を行う。

○ 特定共同アトリエ・スレート千軒講と生活景醸成モデル

既往研究を下地に、特定事例の筆頭に挙げていたスレート民家・集落の調査・データ作成を進める。これまで相互連携がなされていなかった石巻市雄勝、南三陸町入谷、登米市登米町北沢といった重要エリアの調査と相互連絡を図り、また遺構の保全や未利用材活用を図るべく人的調整を進め、以降の活動内容を明確化する。

○ ネットワーク化・サミット等に向けた地域への活動紹介・発信準備

研究実施体制、分担内容を固め、活動の記録・発信に関する方針および具体的方法論について議論を重ね、定期的な小冊子の発行、WEBを用いた不特定多数への発信等を進めていくことをめざす。なお、WEB発信の本格化は、平成29年度秋季を予定している。

(3) 背景

都市の存続は、これを取りまく農山漁村地域の健全な営みが基盤となって成立する。昨今の都市至上主義によって自立性が失われつつある農山漁村の現況を考えると、地域資源を活かした持続可能な生業を再構築し、それらの連携によって、新たな地域産業ネットワークを形成する必要がある。このとき、地域を構成する新たな生業・産業は、巨大都市における高次産業やマネー経済的成長を望むのではなく、身の丈にあった経営戦略をもち、創出するものとしては高品質をめざし、結果として地域の生活景が美しくなるような、持続可能・高耐久高品質・風土醸成的なあり方をめざしたい。そして、そのような観点においては、地域のそれまでの文脈を熟知した老・壮世代と、現代的な価値観をもった若年世代の双方による多世代共創が不可欠であると考えられるのである。

ところで、農山漁村は、古来の1次産業だけで成り立っている訳ではない。本研究で取り上げる陸前漁村地方の硯・石盤・天然スレートや、荘内農村地方の養蚕・織物文化といった各地の近代化遺産が示すように、いわゆる殖産興業のなかで開発された2次産業も少なくない。1次・2次産業の混成が地域産業を形成してきた点は、地域の歴史的な文脈やアイデンティティにおいても重要である。

加えて、農山漁村の生業は専門的でないことも指摘したい。自給を兼ねた1次系の生業、農閑期等に行う家内2次系の生業、そして世代間共助福祉や人材育成すなわち教育まで、百姓的な生活力があるからこそ、草刈りの行き届いた緑と多世代の笑い声がある美しい生活景が醸成されてきたといえる。

こうした地域の多面性を考えるとき、もっとも重要な因子となるのは人材である。高齢化が進む地方においては若者の人材不足が深刻化しているが、最近の若い世代の中には、かつてのような経済的成功よりもリアルな充実感を求める人々もいる。こうした人々は、百姓的な知恵・技を有した地域の老人を敬慕している。ただし、ライフワークと経済的自立を両立できる多世代共創の場は不足している。

地域産業の現場はかつて、分散した孤独な営みのイメージがあったが、現在は、地域住

民同士だけでなく、出身者や来訪者、遠隔で連携する人々からなるコミュニティ・ネットワークが格段に進化している。地域間連携により新たな地域産業の形成をめざすことも不可能ではない。こうしてみると、本研究が主対象とする東北地方は、1次・2次産業に関わる基盤・資源を保持し、東日本大震災のダメージの一方で新たな人材交流の素地が形成されている、一種のフロンティアとみることもできる。

そこで本プロジェクトでは、上記背景に鑑みて「共同アトリエ（CA：Co-atelier）」なる概念を提言し、実践的検討を行う。CAは、農林水産・鉱工業・建築・アートなど、地域の素材や環境・文化を活かし、主に身体的技能を通して価値を生み出す生業の現場である。東北地方を中心に、地域に生きる若者らが、高齢世代の知恵・技を継承しながら、小さくとも内発的なCA群を再発見・創出・育成し、そのコミュニティやネットワークを活かして、新たな地域産業の形成をめざす。CA群の漸次的な営みは、文化遺産や自然環境の保全など、地域毎の多彩で美しい「生活景の醸成（LS：Life-scape Maturing）」と良く整合するし、またLSは、多世代が共有できる長期的な目標となる。農山漁村をはじめとする地域の多義多極性と自立性を根底から静かに再構築するこの試みは、持続可能な地域・都市づくりに貢献すると考えられる。

3 - 2. ロジックモデル

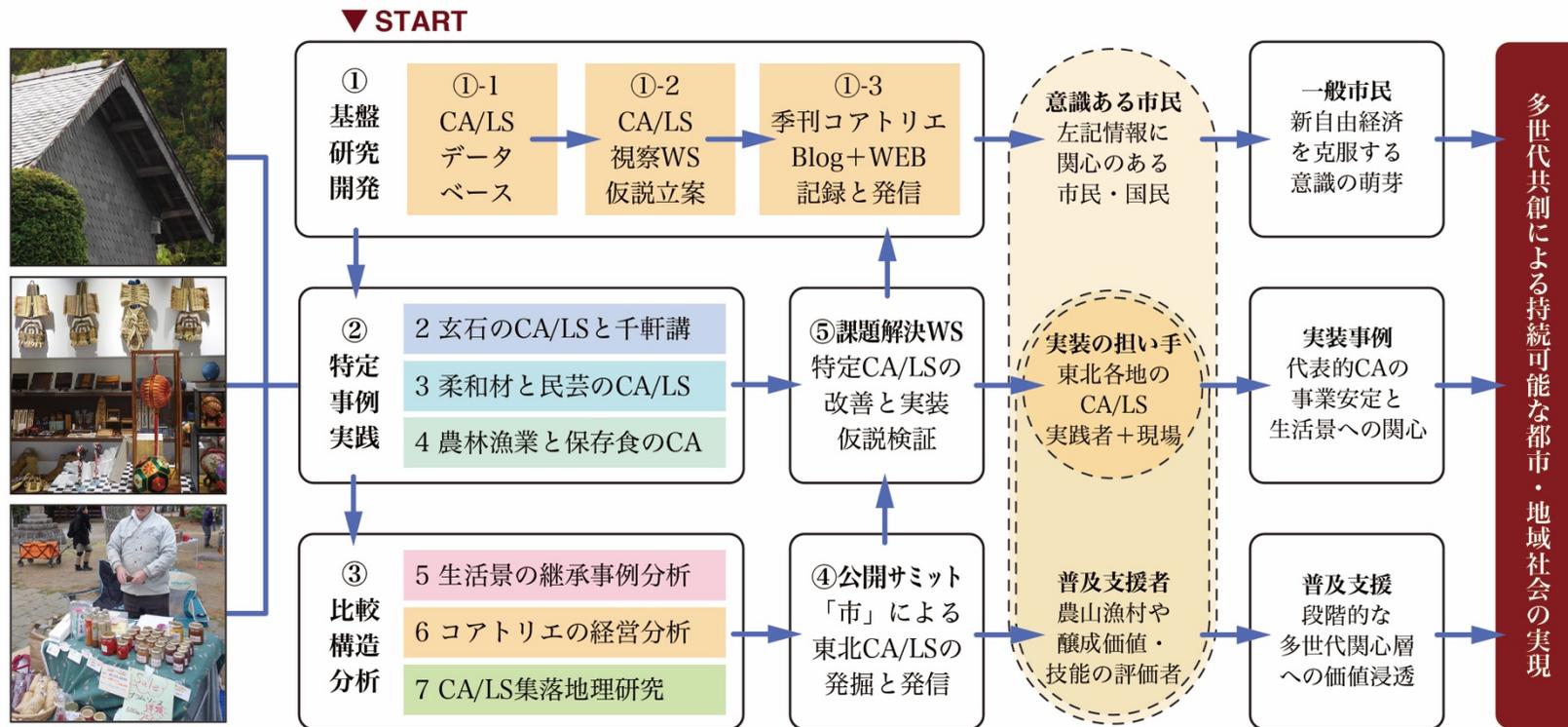


図 1 大沼プロジェクト・ロジックモデル (2017.3版)

3-3. 実施方法・実施内容

本研究では、計画書記載のとおり、以下図2の実施項目を進める。なお、研究機関が複数にまたがることから、右列に協力機関による研究副題との関連性を記す。

すなわち、東北地方を中心として、本研究が着目するような共同アトリエや価値醸成景観の事例をひろく集めるデータベース構築と比較分析を共通基盤とし(①)、特定事例の実践活動・スレート千軒講を中心として多世代共創による活動と生活景醸成のモデル記述を試み(②)、他にも代表的な事例について情報収集しながら、異分野の特定事例の発見と運営・育成実践を展開する(③)。

また、そこで得られた情報・人脈をもとに、主に共同アトリエ同士が結びつきを形成するための「市」のような公開催事を連続的に企画して、小さな動きを連動させるネットワーク化の可能性を検討しながら(④)、各々の取組みや地域が抱えている課題の解決方法を共有、検討する「課題解決ワークショップ」を実施する(⑤)。

上記の討議のなかから、「生活景の醸成を目標の一つに掲げる地域に根ざした農山漁村共同アトリエ群と、その多世代共創の内実について」の知見をまとめ、論文はじめ学術的蓄積と情報発信を進めていく(⑥)。こうした研究開発プロセスを構想している。

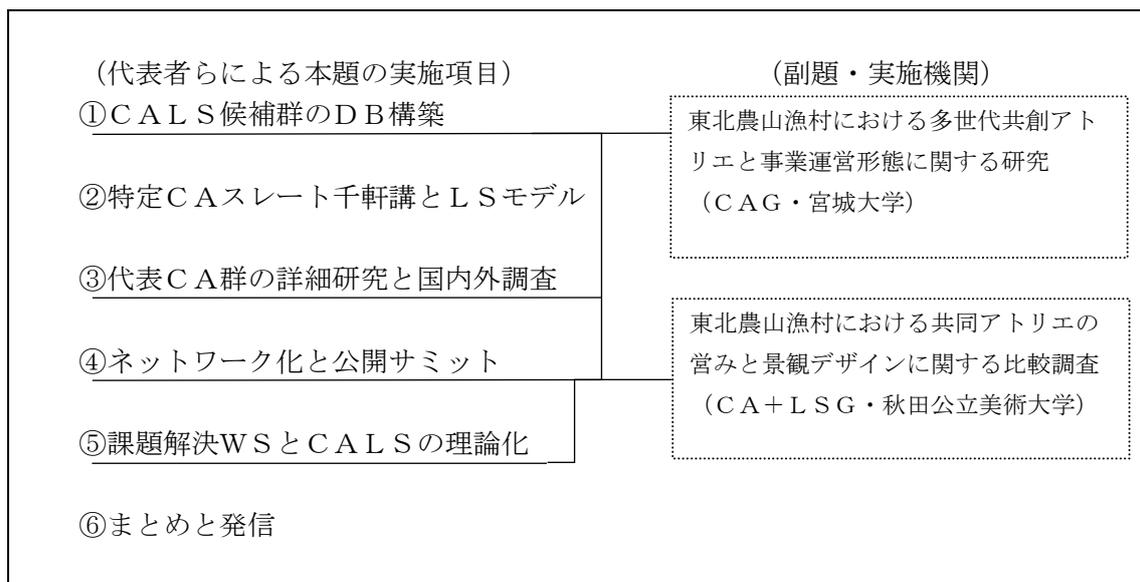


図2 研究実施項目

ここで、前記ロジックモデルを念頭におくと、上記の具体化のためには、①～⑤の動きが循環性をもって計画・実施されることが必要である。そこで本プロジェクトにおいては、そのような循環的方法を採ることとし、研究期間のなかでは以下表1のようなプロセスとサイクルをもって進めることとする。

全期間の6分の1にあたる平成28年度が終了した現在は、概ね予定通り進行している。すなわち、共同アトリエ的な事例をひろく集め、データベースの基盤を作成し、レコードを蓄積しつつある。また、特定事例である陸前地方におけるスレート民家保全ネットワー

ク「スレート千軒講」の設立に至り、その試行となる現地ワークショップを開催した。今後は、ひろい対象領域において定期的な現地ミニサミット・課題解決ワークショップを重ねていき、所有者間・地域間のネットワーク化を図っていく所存である。

表 1 研究実施項目

実施項目	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	平成 31 年度	
(PDCA 的な実施項目の循環)	① ↓ ②→	① ↓ ②→③→④	① ← ⑤ ↓ 1 周目 ↑ ②→③→④	① ← ⑤ ↓ 2 周目 ↑ ②→③→④	① ← ⑤ ↓ 2 周目 完 自立めざして
① C A L S 候補群の D B 構築	●データベース化				
② 特定 C A スレート千軒講 L S モデル	●スレート千軒講・アカデミー				
③ 代表 C A 群の詳細研究と国内外調査		●特定事例への支援と国内外比較調査			
④ ネットワーク化と公開サミット		●季刊コアトリエ	●公開と連携にむけた活動		
⑤ 課題解決 W S と C A L S 理論化			●課題解決ワークショップと理論化		
⑥ まとめと発信				●発信・論文・事例相互の連携 / まとめ	

3 - 4. 研究開発結果・成果

(1) 明らかになったこと

① RQ1) 多様な産業遺産の再評価と生業場としての再生可能性

多様な産業遺産を再評価するため、東北7県における、いわゆる文化的景観や伝統的工芸品、産業遺産を通観し、研究課題を深めるための全体像を明らかにした。

土地・自然環境に根ざした農林水産業をはじめとする1次産業系統の形成と、それに対して国家中央から期待された食料増産の機運、そして殖産興業たる大規模な2次産業系の開発の足跡が各地にみられる。これらを表面的に捉えれば、東北をはじめとする周縁の地方は、中央の動きに呼応し、収奪されながらも経済発展の余波を吸収するという繰り返しがああり、それが近代史であったと概括することもできる。

しかし「共同アトリエ」の視点を付与したことによって、そうした大きなうねりのなかで内発的に形成してきた生業の多様性と可能性を見いだすことができた。例えば、伝統的工芸品に指定されているものは、それらの代表例と捉えることもできる。そして、このような顕在化された生業も重要だが、同時に地域のくらしと文化を高める多様な営みを包括的に評価する視点が不可欠といえる。初年次にあたる平成28年度は、こうした観点の地平と事例調査の枠組みを見いだすことができたことが最大の成果であると考えている。

一方、将来にわたっての「生業場としての再生可能性」については、当然ながら半年間の検討で明らかにできる内容ではない。その事例調査がようやく途についたというべきである。幸い、計画時点から特定事例に掲げていたスレート産業のほか、宮城県丸森町における「柔和材のコアトリエ」や、山形県鶴岡市の焼畑を含む「食品加工コアトリエ」など観察調査に値すると思われる共創事例に遭遇できる人脈・情報源を獲得しつつある。

すなわち、今年度得られた全体像のなかで、注目すべき「特定事例」、これと比較すべき「比較事例」、さらには「関連事例」と、広い視野と深い分析考察を両得するための取り組みを進めていく必要があるといえる。

② RQ2) 共同アトリエ (CA) の意義と多世代共創状況

上記RQ1にも関連して、大きな産業形成のなかで小さな生業が果たして来た、また今後果たしうる役割・意義について考察を深めることができ、実施者・協力者による議論を重ねることによって、本プロジェクトが指す「共同アトリエ (コアトリエ・CA)」とは何か、その定義を明確にすることができた。

本報告書の冒頭にも述べたように、その定義は「農林水産・鉱工業・建築・アートなど、地域の素材や環境・文化を活かし、主に身体的技能を通して価値を生み出す多世代共創の生業場」とするに至った。とりわけ本プロジェクトが注目するのは、伝統的または先導的もしくは萌芽的な取組みであり、必ずしも客観的評価が十分でない事例である。検討の過程では、取組み事例の中核メンバーがかなり少数であるとか、一世帯で成立しているという事例も紹介され、ある意味、現代の農山漁村らしい一面もうかがわせる検討経過をたどった。本プロジェクトにおいては、そのような零細な事例についても当初から除外することはせず、コミュニティやネットワークの形成状況、関係者らの世代構造などを今後調査していく必要があり、この点が今後の最重要課題の一つとなっている。

③ RQ3 地域に根ざしたマルチクリエイター像

上記RQ2にも関連して、注目すべき事例においては、当然ではあるが、例外なく中心人物がいることを確認している。その中心人物は、例えば本研究における実施者、協力者にも見られるように、複数の立場を兼ねながら、横断的に状況改善していくマルチクリエイターであることを体現する存在となっている。

本研究開発プロジェクトにおいては、実施者はいったんそれらを客観視する研究者的立場とする一方、協力者については、特定/比較事例における実存のプレイヤー/ステークホルダーとして研究対象に加え、その人自身のみならず、そこで共同する主要なプレイヤーの個人的状況も、可能な限り明らかにする必要がある。

その意味では、後述する「共同アトリエデータベース」にリレーションシップを有する「人物カルテ」を作成していく必要があり、これについては基本的なデータ基盤を整備することで初年度を終えた。つまり次年度に向けての課題として、生業場をめぐる中核人物の人物像・多世代共創状況・マルチクリエイター像を、より明確にしていく必要性に帰着している。

④ RQ4) 共同アトリエ (CA) がめざす生活景醸成 (LS) の意義

本プロジェクトにて採り上げるCA事例は、一定の情報蓄積ののち、幾つかの視点で類型化して分析する必要がある。このとき、CAが歩んで来た道のり (=時間) に着目すると、人間の成長過程のように「若年」「壮年」「老年」といったステージのどこに位置づけられるのか、という議論が可能になる。生活景醸成 (LS) の意義とその検討は、主には上記「壮年」「老年」に相当するCAにおいては、少なからず重要な課題とされるだろうというのが本研究の仮説である。

初年度においては、そのことを直接被験者に尋ねるとか、それを事例的に実証するという段階には至っていない。ただし、景観形成に直接寄与する分野として、スレート千軒講を特定事例に位置づけたのは、その意義の確認である本RQを念頭に置いていたからである。すなわち、生活景醸成の一様態として「景観保全の気運」が生まれ、それが地域産業

の持続と結びつくような事例の創出、論理記述ができれば、本RQに対する回答の一例として提示することになる。

本RQを、引き続きプロジェクト全体にわたる重要な観点、論点として据え、実践を進めていく所存である。

⑤ RQ5) 分散ネットワーク型の地域産業デザイン

本RQは、実践のすえに到達をめざす、やや遠い目標でもあって、初年度においては明らかにするには至っていない。ただし事例調査を進めるうえで参照すべきエリアと見定めた新潟県燕三条地域は、すでにこのRQに対する一定の回答ともいえるべき産業形成がみられる。すなわち、刃物・鍛冶関係の生業場を起源とする様々な産業の形成・発展状況である。新旧・中小のさまざまな2次産業系の生業場が連携するとともに、そのなかのリーダー格となっている企業が経済的な動きを先導し、公的立場からも地場産業振興センターがこれを支えている。毎年秋に行われるKOUBAの祭典は、その集大成ともいえるべきプレゼンテーションの機会となっている。もちろん、こうした先駆的エリアにおいても課題は尽きないと推察されることから、次年度は本研究としても合宿を含めた視察調査を計画している。すなわち、本RQそのものが、次年度への継続検討課題であるといえる。

⑥ RQ6) 小さな多世代共創による地域産業形成モデルと多世代共創の意義

本RQは、実践・一定の成果のすえの論述をめざしている遠い目標である。このため、初年度においては明らかにするには至っていない。

参考事例として、宮城県の地元紙・河北新報の最近の記事を採り上げておく。「トモノミクス」なる文言が提示され、商業的成功だけを望むのではなく、地域に共存する多様な企業が多様に連携し、関係者は2つの名刺を持って（副業をもって）、新たな価値を創出しようという動きを奨励するものである。本プロジェクトを開始して間もない頃に始まった特集記事であり、現代的課題であることを再確認することとなった。ただし、多くの支店企業が集積する仙台の立地性もあり、また経済的波及にも配慮して、そのプレイヤーは主に企業であること、また活動内容は商業的な側面も多く、1次・2次系へのこだわりや生活景の醸成には言及されていない点で、本プロジェクトと内容を異にしている。

いずれにせよ、研究期間はそう長くはなく、論述への準備を常に重ねていくことが課題といえる。

(2) 今年度の進捗・成果

3-3および表2に示したように、本プロジェクトは実践による検討を含むことから、全体にわたってPDCA的なサイクルを必要とする。とくに表2に示した循環的な作業プロセスをやや詳述すると、以下2系統・8つの工程が想起される(図3)。すなわち、実践を広げるPDCAと、課題をまとめるPDCAであり、循環的かつ複眼往復的であることによって、実践活動としての一定の成果と、学術的知見を両得しようという試みである。

初年度にあたる平成28年度は、このうち前半＝実践を広げるための取組みを重ねることが中心であった。以下、3-3に挙げた項目にしたがって活動経過を概説する。

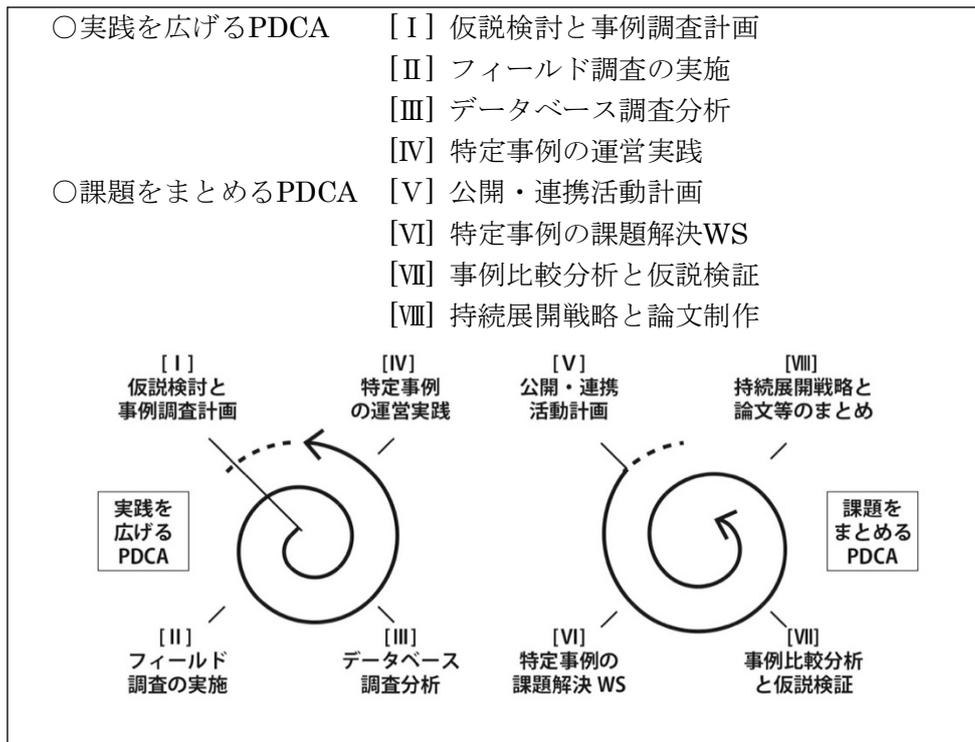


図 3 研究開発ワークの推進サイクル概念図

① 実施項目①・共同アトリエ（CA）／生活景醸成（LS）候補群のデータベース構築

a) 共同アトリエ（CA）データベースについて

既往研究を下地に、実施者・協力者から基本情報を集め、データベース（DB）ソフトを活用して合理的な入力・検索が行えるシステム開発を行った。以下図4は、そのレコードの一例である。レコード数は150件以上に上っているが、情報量はまだ限定的であり、今後はフィールド調査を交え、いっそうの濃密化をはかる予定である。

なお初年度は、共同アトリエの定義について、実施者・協力者における共通認識を形成しながら事例を抽出することに力点を置いた（表2）。だが、萌芽性、成熟度などに相当のばらつきがあり、今後の類型化をどのように設定するかが課題となっている。

とはいえ、当初より特定事例と定めていたスレート関連の活動のほか、宮城県丸森町における布・紙・民芸等の柔和材コアトリエや、山形県庄内・最上地方における食品加工等のコアトリエなど、注目すべき事例についての情報が集まりつつある。

例えば、前者（丸森）については、協力者を中心として、親子3世代で機織り技術を現代的に展開する小さなコアトリエを創始しようとしており、周辺には蚕糸業の遺産群や拠点となった篤農家の屋敷構え、さらには桑園から新たな薬品エキスを抽出しようという東北大学の取組など、小さいながら個性あるプレイヤーの顔が見える。

後者（鶴岡）については、だだちゃ豆や焼畑による赤カブ栽培などを支援してきた山形大学在来作物研究会の取組みを参照しつつ、養蚕や製茶を再始動しようという史跡・松ヶ岡開墾場をコアトリエとして再評価する検討に着手したところである。



図 4 ひと・こと・場に着目した共同アトリエの事例データベース基盤と一部入力例

表 2 共同アトリエ (CA) データベース作成にかかる主な作業履歴

- | |
|--|
| <p>[I] 仮説検討と事例調査計画</p> <ul style="list-style-type: none"> 161007金~161102水 データベース(DB)構築準備・DB講習会打合せ 161210土-27火 CADBフォーマットver1制作、CAG活動キックオフ会議 <p>[II] フィールド調査の実施</p> <ul style="list-style-type: none"> 161115火-16水 松ヶ岡のCA可能性視察@鶴岡 161122火 農業士聞き取り+ 北沢@栗原登米 170108日 手づくり市視察会議@薬師堂 170117火-18水 生業と生活景の文献調査@東京 170121土-22日 建農村50年+打合せ@東京秋田 170124火 工芸継承展情報収集@多賀城東北歴博 170208水-10金 匠の技と風土研究@長岡燕三条 170214火-15水 地域おこしCA調査@栗原登米 170304土 農建生科学史聞き取り@仙台 170319日-20月 苧織ほかCA調査@会津 <p>[III] データベース調査分析</p> <ul style="list-style-type: none"> 170206月 CADBの検討会議 170220月-22水 CA合宿with他@鶴岡 <p>[IV] 特定事例の運営実践 (スレート関係以外)</p> <ul style="list-style-type: none"> 170329水 柔和材CA調査@宮城丸森 |
|--|

b) L Sデータベースについて

基本的に、次項の実施項目②において当該事例のDB構築を行うことを第一義としたが、それらの位置づけを確認することも念頭に置きながら、東北7県の重要景観区域等について情報収集を行った。本研究ではとくに、生業に着目したうえで景観保全に関わる事例を選び、事例抽出を進めていく必要に帰着し、先行研究を参照しつつ、本プロジェクトの位置づけを確認した。

東北地方の生業史と産業遺産をめぐるには、多くの論考がある。岩本（1994）は、明治以降の東北への投資が中央収奪型のものであることを指摘し、河西（2001）は、この収奪される東北像が戊辰戦争後につくられたと指摘する。以下、奥羽越列藩同盟や電力管轄を念頭に置き、新潟県を含む7県を概観すべく、災害史等を目印とする20年程度の近代区分案（8期+現代）を仮定、考察する。

多様な気候風土の一方、米の単一生産域も広い東北は、近代化に遅れ、北海道や後の満蒙開拓団、域内にあっては地主・小作の格差増大、そして冷害凶作・震災津波と苦労が絶えない時代が続いた。不運で未開だが資源豊富な東北に投資開発する大義は十分で、殖産興業、食糧増産、電源開発など、中央からの期待/温情/支援と、投資/収奪が繰り返され、地元も相応にそれを望んだ面があった。

この農村計画(A)と産業開発(C)を裏表とする歩みの間に、東北本来の多様性を見出すべく、工芸生業(B)の面を模索する。長い農閑期が生じる東北における手仕事は重要で、秋田藩で下級武士らの内職として奨励された「曲げわっぱ」は好例である。近代にはB.タウトが招聘された国立工芸指導所（1928）や、これに端を発した近代工芸および工業デザイン、昭和初期の金融恐慌による東北農山漁村の疲弊に対して1933年に山形県新庄市に設置された積雪地方農村経済調査所（雪調）の役割も見逃せない。ここでは農村工業として今和次郎や柳宗悦らによる実践的研究が進められ、C・ペリアンの助言を受けるなど、副業化を念頭に様々な試みがなされていた。また秋岡・東北工大らは、裏作工芸を都市への商品ではなく、直接地域のくらしを高める工作と位置づけ、岩手大野村や北海道置戸町といった成功例を創出した（1975-）。1974年に制度化された経済産業大臣指定伝統的工芸品は、高度成長期に衰退しつつある伝統産業の再評価と振興をはかったものであり、東北でも雄勝硯をはじめ指定品が相当数ある。

これらを念頭に置きつつ、文科省や経済産業省が管轄する文化的景観、伝統的工芸品、産業遺産の指定案件を概観する（表3）。

表 3 東北7県の近代のあゆみと文化的景観・伝統的工芸品・近代化産業遺産

(次年度発表予定：大沼ほか「東北地方の文化的景観・伝統工芸・産業遺産等からみた陸前スレート民家・集落の位置づけ」日本建築学会大会2017；より)

エポック/時代区分案/論/県	A農村計画	B工芸生業	C産業開発	1新潟県	2福島県	3山形県	4秋田県	5宮城県	6岩手県	7青森県
東北古代中世/原風土			産金仏国土 たたら製鉄	11 羽越しな布		3b 最上川 3b 庄内平野 31 羽越しな布			6b 寺寺村瓦葺 61 南部鉄器 62 秀衡塗	7a 十三湖の景観 7b 下北のヒノキ
東北近世	新田開発 育苗法等	交通要衝に 産地形成等 蚕蚕の普及	航路開発 産業奨励	12 与板打刀物 1b 越後3棚田 1R 佐渡鉱山 13 塩 沢 軸 14 蒸籠起銅器	21 会津本郷焼 22 会 津 塗 23 大塚相馬焼 2b 松川 浦 24 製糖機械工	32 山形鑄物 33 置 賜 軸 3b 飯豊の敷産業 34 山形伊達	41 川連漆器 42 秋田杉桶樽 4b 矢立岸秋田形 43 曲げわっぱ 44 樽 細 工	51 雄 勝、碓 52 鳴子漆器 5b 小山田川形漆器 5R 細倉鉱山 53 宮城伝説くし	6b 盛岡時代歌村 6b 遠 野 63 宮谷堂筆筒	7c 七里長浜砂林 71 津 軽 塗 7b 中野町の漆原
1860 万延 01_ 航米日録										
東北近代①期 (16年間)	地租改正 北海道開拓 学制公布		戊辰戦争 殖産興業 国立銀行	15 村上堆土 16 加茂桐華節 17 十日町餅	2b 安積疏水 2R 松ヶ岡調整場	35 天童将棋駒 3b 田川の焼さば 3R 松ヶ岡調整場	4R 小坂鉱山			
1876 明治 09_ 東北巡幸										
東北近代②期 (20年間)	農民層分解 町村合併 新地主・金融	畜舎構造法 百城風物産陳列所	西南戦争 東北線開通 日露戦争	15 金津油田	25 磐城炭鉱	35 製洋風建築群 3T 最上川橋梁		55 金華山灯台 5T 野蒜築港 5U 紡績化学	6R 釜石製鉄 6U 小岩井農場	7R 尻屋崎灯台 7b 津軽の林檎畑
1896 明治 29_ 明治津波										
東北近代③期 (18年間)	米の検査と増収 産業組合法 東北振興会	徒弟学校各地に 秋田木工前身等	三国干渉 日露戦争 韓国併合	1T 高田世界館	2T 八釜鉱山 2U 喜多方煉 2V 一ノ戸川橋梁	3U 板谷 S.B. 3V 新庄車庫 3W 米沢高工			6b 宮沢賢治 65 岩手軽便鉄道	75 八甲田丸
1914 大正 03_ 第一次大戦										
東北近代④期 (19年間)	米税法・小作争議 東北大凶作 経済更生運動	民芸運動 工芸指導所 東北工芸協会	恐慌・関東大震災 財閥産業支配 満州事変	1U 燕分水路 1V 清水隧道				45 豊川油田 5V 松山自動車道 5W 遠野アソビナ		
1933 昭和 08_ 昭和津波										
東北近代⑤期 (12年間)	満蒙移民 東北更新会・同業会 農地開発営団	タウト招聘 日本民俗学会 ベリアン来訪	産業報国会 大政翼賛会 太平洋戦争	1b 清願寺稲架木		3X 真室川鉄道	4b 山崎しめじ			
1945 昭和 20_ 終戦 / 改革										
東北近代⑥期 (19年間)	農地改革・農村改善 農協・土地改良区 農村建築研究会	産業工業試験場 天童木工展 産産・工業デザイン	憲法・民主化 電源開発促進法 一全総	18 小千谷縮 ・ 縮の再興			4c 八 郎 湯		天然スレートは、硯から 教育用石盤を経て、近代 洋風建築に使われ、昭和 後期にかけて宮城・岩手 の民家の防火のために普及。 位置づけが容易でない。	
1964 昭和 39_ 東京五輪										
東北近代⑦期 (18年間)	集落構造論 建築学会農村振興 圏域・空間計画論	工業美術系大学等 伝統工芸各地で 大野村の製作工芸	新全総 石油危機 三全総							
1982 昭和 57_ 東北新幹線										
東北近代⑧期 (29年間)	海外集落・景観 都市・農村関係 中山間・居住 まちづくり ガバナンス	技術継承 量から質へ 観光との協働 情報化 環境・省資源	四全総 地方多極化 政令市・仙台 21 世 GD 政令市・新潟		2b 矢/原蕎麦畑					
1995 平成 07_ 阪神大震災 2004 平成 16_ 中越地震 2011 平成 23_ 東日本大震災										
東北 現代	集落復興 住み継ぎ	地域性 手仕事	国土強靱化 ・・・	1b 文景: 14 11 伝工: 16 1R 産遺: 7	2b 文景: 7 21 伝工: 4 2R 産遺: 7	3b 文景: 10 31 伝工: 5 3R 産遺: 8	4b 文景: 11 41 伝工: 4 4R 産遺: 8	5b 文景: 6 51 伝工: 3 5R 産遺: 6	6b 文景: 16 61 伝工: 4 6R 産遺: 3	7b 文景: 15 71 伝工: 1 7R 産遺: 3
註・凡例	* 時代区分案は独自設定、左 3 列は主に以下の資料を参照、右欄の時代仮定は右記による。 列 A 農村計画: 須永 (1966) ; 近代日本の地主と農民 / 農村計画委 50 周年資料 (2017.1) ほか 列 B 工芸生業: 日本・地域・デザイン史 II (美学出版 2016) / 岩本 (2002) ; 東北地域産業史ほか 列 C 産業開発: 建築雑誌 2012.1 (前夜の東北) / 岩本 (1994) ; 東北開発 120 年ほか					* 右 7 列は文化庁資料、関連 WEB 等による。 1b 文景: 重要文化的景観および文化的景観の事例 11 伝工: 経済産業大臣指定伝統的工芸品の事例 1R 産遺: 経済産業省近代化産業遺産の認定事例				

文化的景観については、東北では自然環境との長い呼応による物件が多く指定される一方で、少例ながら近代の例もある。他方、産業遺産は、地下資源や港湾・灯台など東北近代開発を代表する 1 次産業が列挙され、概ね第 4 期までに集中している。伝統的工芸品は、ほぼ成立を近世以前に求める記述が多い。総じて日本海側は近世から近代後期まで多様だが、太平洋側は1930年代以降の物件がない。

ちなみに、陸前スレート民家・集落は、宮城県から岩手県南にかけて分布し、遺構としては第 3 期～第 7 期、硯等の工芸を含めた生業景としては近代を通じて関係づけられ、超時代、超領域的であるといえる。

いずれにせよ、列挙した文化的景観、伝統的工芸品、産業遺産は、中央省庁監修で選考された道標として重要だが、疲弊した農山漁村の生業再構築に資するには、表の「行間」の真正な営み、小さな生業の再評価-本研究における共同アトリエと生活景への波及を考える視点-が不可欠であるといえよう。以上は、表 3 の内容を含めて次年度に学会発表の予定である。

また、これらの検討は、これまでの景観保全に関わる多様な調査研究歴を基盤としなが

ら、本プロジェクトを通して得たものであり、スレート建築や民俗学における識者である研究協力者、また登米町出身のキーパーソンらに謝意を申し上げたい。すなわち、こうした人脈形成を通して、本研究が徐々に地元でも認知されつつある（表 4）。

表 4 生活景醸成（LS）データベース作成にかかる主な作業履歴

[I] 仮説検討と事例調査計画 ・ 161118金 LSGスレート研究実施計画 ・ 161019水 研究相談 ・ 161129火 LSGスレート研究会議
[II] フィールド調査の実施 ・ 161031月 登米町民家調査 ・ 161124木 観慶丸商店タイル調査@石巻 ・ 170313月-14火 多彩景研究；京都伝工展他@東京
[III] データベース調査分析 ・ 161208木 LSG調査研究打合せ@石巻雄勝 ・ 161216金-2月 LSGスレート会議、DB入力打合せ ・ 17/01月- 文化的景観・伝統的工芸品・産業遺産の情報収集
[IV] 特定事例の運営実践（研究実施項目②へ）
[VIII] 持続展開戦略と論文制作 ・ 17/02月- 日本建築学会大会論文執筆

② 実施項目② 特定事例・スレート千軒講と生活景醸成モデル

自身の既往研究を下地に、特定事例の筆頭に挙げていたスレート民家・集落の調査・データ作成を進めた。これまで相互連携がなされていなかった石巻市雄勝、南三陸町入谷、登米市登米町北沢といった重要エリアの調査と相互連絡を図り、また遺構の保全や未利用材活用を図るべく人的調整を進めてきた。

なお、フィールド調査の過程で、産業遺産ともいふべき登米市登米町北沢集落の山林において、往時に大規模開発した際のスレート生産の端材が大量に残されていることが判明した。その量は、採掘される山間を一山埋め尽くすほどの量であって、確かに屋根材にはならないが、何らかの工芸材料になる可能性もある。独特の風合いをもつ碎石の類としての有効活用可能性も含め、議論となった（図 5）。本件は、生活景醸成のモデル論というよりは、共同アトリエの創出の一候補として、今後の検討に資することとする。

さて、主要テーマとしては、まず、既に陸前地方において分布マップを作成していたデータが2000強あった。これらは外観からの目視確認がほとんどであり、震災および復興の数年間における調査としては直接所有者にアプローチしにくい状況も多々あった。これに対して、本プロジェクトにて正式に協働することとなった実施者の一人は、地元である南三陸町志津川入谷地区において、地元における復興活動の傍ら、スレート民家の個別調査を進めてきていた。個人情報に配慮しつつも、顔の見える関係のなかで収集してきた情報にはより濃密さがあり、今後の保全方策を検討するうえではモデルの好例となる可能性が高い。

すなわち「広さ」に成果があった代表者による既存情報と、「深さ」に優位性のある協

力者による入谷地区の情報によって、スレート民家がおかれた状況や課題について、一定の通観した検討が可能と考えられる。そこで、今後の情報管理については、これらの双方に活かせるフォーマットを念頭に置いて、統合的なデータベースを構築することとした。

次項の図 6は、その書式の中核部分であり、どこにどのようなスレート民家があり、どのような状態にあるのかが確認できるファイルとなっている。この「場の情報」を整理すると、「共同アトリエデータベース」とのリンクを企図することはもちろん、こうした生活景の醸成を支えるスレート葺きおよび生産技術の保全が不可欠であることに帰着する。

つまり、ここでの「技術継承」を行いつつ、スレート生業そのものの再構築を図る必要がある。そこで本プロジェクトでは、国選定石盤葺技術保持者を研究協力者に迎え、同氏が断続的に進めて来た講習会を、本プロジェクトで全面支援し、環境保全・技術継承・地域文化の意識啓発と人材交流、そして多世代共創をめざす「スレートアカデミー」を、民家保全のための「スレート千軒講」との車の両輪として進めていく基本方針を導出するに至った。

以上初年度は、今後の活動目標として「スレート千軒講」「スレートアカデミー」を両輪として進めることを基軸に据えながら、スレート民家調査の深化や玄石コアトリエについても検討を進めていく方針に帰着した(表 5)。



図 5 登米市登米町北沢のスレート未利用材と1975年の残置エリア

エリア 南三陸エリア	都道府県 4 宮城県	市町村 南三陸
所有者 [REDACTED]	字 集落 [REDACTED]	番地 [REDACTED]
回答者 [REDACTED]	固定 電話 [REDACTED]	携帯 電話 [REDACTED]

 <p>詳細</p> <div style="border: 1px solid gray; height: 80px; width: 100%;"></div>	<p>当家の創建 1952年 頃</p> <p>スレート建築の状況 <input type="checkbox"/> 問題なし <input type="checkbox"/> 少々問題あり <input type="checkbox"/> 状態</p> <p>建物保全の意向 <input type="checkbox"/> 保全したい <input type="checkbox"/> 近々解体予定 <input type="checkbox"/> 現世代では維持 <input type="checkbox"/> その他</p> <p>保全での懸念 <input type="checkbox"/> 資材が不足 <input type="checkbox"/> 職人が不足 <input type="checkbox"/> 相談</p> <p> <input type="checkbox"/> 所有者・運営協力 <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> 所有者・入会希望 千軒講参加意志 <input type="checkbox"/> 協力業者として <input type="checkbox"/> 景観まちづくりとして </p>
--	--

入力日 2017/02/07	調査入力者メモ <div style="border: 1px solid gray; height: 80px; width: 100%;"></div>
入力者名 <div style="border: 1px solid gray; height: 20px; width: 100%;"></div>	
音声メモ <div style="border: 1px solid gray; height: 20px; width: 100%;"></div>	

図 6 共同アトリエの事例データベース基盤と一部入力例

表 5 特定事例・スレート千軒講と生活景醸成モデルにかかる主な作業履歴

<p>[I] 仮説検討と事例調査計画</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 170112木-20金 LS千軒講の検討会議 ・ 170127金 東北民家史聞き取り等@仙台 <p>[II] フィールド調査の実施</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 161223金-24土 LSスレートWS@雄勝,入谷,登米 ・ 161226月 スレ廃材利用・まちづくり打合@登米 ・ 170211土 スレ建築保全調査研究@雄勝登米 <p>[III] データベース調査分析</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 170214火 LS千軒講のデータベースと検討会議 <p>[IV] 特定事例の運営実践</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 170308水 スレ千軒講WS会場資材準備@登米 ・ 170320月-21火 千軒講スレCALSWS@登米 <p>[V] 公開・連携活動計画</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 161005水 公開講座スレート千軒講@一番町ロビー (別事業) ・ 161015土 岩手ヘリテージMN講座@盛岡 (別事業)
--

- ・161020木 石巻市都市計画審議会@石巻（別事業）
 - ・161104金 塩竈市景観審議会@塩竈（別事業）
 - ・161127日 宮城へリテージMN講座@仙台北番丁（別事業）
- [VII] 事例比較分析と仮説検証
- ・170328火 LSスレ民家集落史研究会議

③実施項目④ ネットワーク化・サミット等に向けた地域への活動紹介・発信準備

上述の実施項目①②を進めるなかで、それぞれの活動深化は研究として最重要であるものの、足跡を記録し、のちの一般公開に向けた準備を進めることは同等に重要である。そこで、研究実施体制、分担内容を少しずつ固め、活動の記録・発信に関する方針および具体的方法論について議論を重ねた。その結果、定期的な小冊子の発行、**Blog**や**WEB**を用いた発信等を進めていくこととなり、そのフォーマットを固め、創刊号の制作にこぎ着けた。

一般的に、ICT技術が進化した現代においては、SNSなどのツールが普及しており、これを用いて記録していくことには一定の合理性がある。だが本プロジェクトは、近視眼的な地元情報の受け売りと陳腐化に、かなり慎重なスタンスをとっている。なぜならば、極めて零細な取組みや、被災した生活者の事情にも踏み込まなければならない場合が想定されるからである。もちろん、公的補助金を拝受している以上、公開できる情報を整備していくことは必須であるが、とりわけ初年度は、どんなフィールドに出てゆくのか、どんな事例に着目するのか、それらに配慮したうえで、公開をめざすこととした。

そこで、前述の「循環と往復によるPDCAサイクル」を念頭において、調査研究・開発の過程を季刊でまとめる「季刊コアトリエ」を発行し（図 7）、これをまず関係者らで共有したうえで、一般公開を次年度の後半から実施すべく、準備を進めていくこととした。

今後は、これを趣旨共有の主要ツールとして用い、事例調査の深化につなげていく予定である。

④ その他概括

以上初年度を概括すると、リサーチ・クエスチョンの〔RQ1：産業遺産の再評価と生業場としての再生可能性〕〔RQ2：CAの意義・位置づけと多世代共創〕〔RQ3：地域に根ざしたマルチクリエイター像〕〔RQ4：CAがめざす生活景醸成＝LSの意義〕〔RQ5：分散ネットワーク型の地域産業デザイン〕のいずれにも関連する、基礎的な作業を進めることができたと考えている。

もちろん、いずれの作業も途についたばかりで内容の充実が急務である。本格化する次年度は、より計画的に実行していきたい。

未来に伝える東北の生業と生活景 コアトリエ

Vol. **1**
Spring
春号 2017

特集：共同アトリエ (Co-Atelier) と
生活景の醸成 (Life-Scape)



survey

木組み小屋を味噌小屋に
昭和のタイル建築から港町的生活景を想う
燕三条・コアトリエ集積地の最高峰
無形民族文化財 オエダラ箕
雪国の暮らしの中の生業を調査する

図 7 季刊コアトリエ創刊号 (平成28年度末版)

3 - 5. 会議等の活動

年月日	名称	場所	概要
H28.10.18	第1回全体会議	大沼研	プロジェクト概要（目標・計画・体制）及びスケジュールの確認・検討
H28.10.30	CAG連携打ち合わせ	大沼研	CAG連携体制、役割分担等の検討
H28.11.29	LSG研究会議	大沼研	千軒講の組織化に向けて
H28.12.2	データベース構築支援講座(1)	大沼研	DB構築に向けたFileMaker活用方策の学習・検討
H28.12.9	データベース構築支援講座(2)	大沼研	DB構築に向けたFileMaker活用方策の学習・検討
H28.12.16	LSG研究会議	大沼研	民家DB構築と実地調査の予定検討
H28.12.22	CAG会議	大沼研	共同アトリエの共通理解に向けた討議、DBの進捗状況報告、直近の調査研究計画等
H28.12.23-24	LSGスレートワークショップ	宮城県雄勝町、入谷、登米町	生活景醸成およびスレート千軒講の共通理解に向けた討議、現地視察等
H29.1.8	CAG手づくり市視察会議	薬師堂手づくり市	共同アトリエの参集の場としての手づくり市の視察
H29.2.6	CAG会議	大沼研	研究協力者による共同アトリエ事例の報告、キーワードの抽出、DBの作成方針に関する討議
H29.2.11	LSGスレート建築保全調査	宮城県雄勝町、登米町	被災地を含む石巻沿岸の遺構残存状況確認、千軒講啓発の計画
H29.2.20-22	CAG合宿ワークショップ	山形県鶴岡市	松ヶ岡開墾場を主要事例とした有形無形資源活用と生業景、在来作物の継承保全、共同アトリエ群の構造化試行＋事例抽出WS
H29.3.20-21	LSG建材試作実験ワークショップ	宮城県登米町	スレート加工現場の再現と、新たな製品開発や利用法の検討（石材素材視察、ずり石と湿式構法、石材カットと寸法形状および利用方法）
H29.3.24	年度末全体会議	大沼研	H28年度研究活動報告及び総括、次年度計画の検討
H29.3.28	LSGスレート民家集落史研究会議	大沼研	スレート民家研究識者からの情報提供及び研究計画への助言、研究方針の検討

4. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況

本研究開発プロジェクトにおいては、特定事例に据えているスレート民家保全ネットワークの形成が、もっとも成果公開に近い内容に達しているが、その一方で、これを単なる建材活用問題に矮小化しないためにも、プロジェクト全体の中に再定置することが重要と考えられる。すなわち、個別各論が先行し、総論が後追いとなっている現況から出発する事情に鑑みて、スレート民家保全論は建築保存修復分野にて情報公開を積極的に行い、共同アトリエ論は、前述「季刊コアトリエ」を通して調査と記録・報告を反すうしながら進めていくこととした。

スレート関係について東北地方にて情報公開した主なものを挙げると

- ・ 161005水 公開講座スレート千軒講@一番町ロビー（別事業）
- ・ 161015土 岩手ヘリテージMN講座@盛岡（別事業）
- ・ 161020木 石巻市都市計画審議会@石巻（別事業）
- ・ 161104金 塩竈市景観審議会@塩竈（別事業）
- ・ 161127日 宮城ヘリテージMN講座@仙台北番丁（別事業）

などがある。今後は、スレート民家保全・技術継承・情報還元を兼ねたサミットと課題解決ワークショップを統合した「スレート千軒講／アカデミーキャラバン（仮称）」を定期的に展開していく予定である。

また、共同アトリエの調査と情報還元・ネットワーク化については、前掲・季刊コアトリエ（図 7・再）の定期発行と、これを用いた情報交換の場「耳寄り市場（仮称）」の創出を計画していく所存である。

5. 研究開発実施体制

（1）研究開発マネジメントグループ

- ①大沼正寛（東北工業大学大学院ライフデザイン学研究科、教授）
- ②実施項目

調査研究・活動推進の統括、グループとの連絡調整、進捗管理、報告書編集

（2）農山漁村共同アトリエ（CA）群 調査グループ

- ①佐々木秀之（宮城大学事業構想学部、准教授）
- ②実施項目

共同アトリエの調査、国内外の産業遺産調査、代表的CAの抽出と詳細調査、データベース作成・調整／CA共創スキームの検討、先導的CAにおける多世代共創作品づくりとサミット実施

（3）生活景醸成（LS）と環境デザイン 調査グループ

- ①竹内泰（東北工業大学大学院工学研究科、准教授）
- ②実施項目

国内外の産業遺産調査、LS事例の抽出調査、スレート千軒講の運営、LS結実モデル検討、スレートアカデミーの発足と人材育成

なお、上記体制を研究実施項目と連関させて図解したものを下図（図 8）に記す。

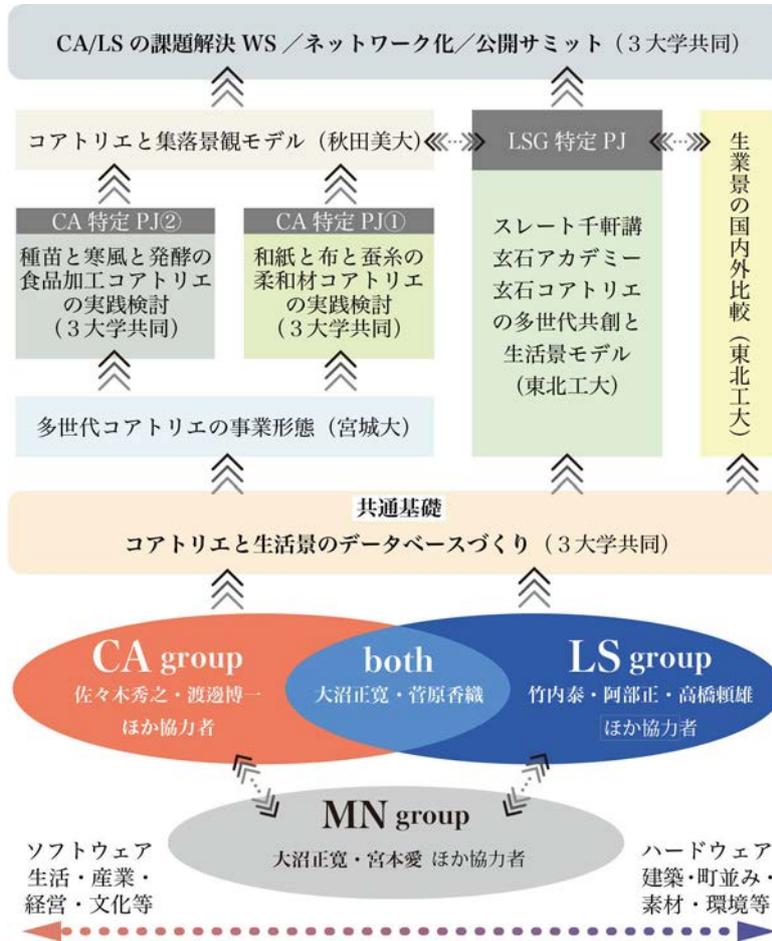


図 8 研究開発実施体制図（平成28年度末版）

6. 研究開発実施者

研究グループ名：マネジメント (MG) グループ

	氏名	フリガナ	所属機関等	所属部署等	役職 (身分)
○	大沼 正寛	オオヌマ マサ ヒロ	東北工業大学	大学院ライフデザイン学研究 科 大学院ライフデザイン学研究 科 大学院	教授
	宮本 愛	ミヤモト アイ	東北工業大学		研究支援CD
	佐藤 隆博	サトウ タカヒロ	東北工業大学		M1
	佐藤 豪	サトウ タケシ	東北工業大学		3年
	木村 美紘	キムラ ミヒロ	東北工業大学		3年
	船山 祐佳	フナヤマ ユウ カ	東北工業大学		3年
	星 裕亮	ホシ ユウスケ	東北工業大学		3年
	佐藤 翔	サトウ ショウ	東北工業大学		3年
	齋藤 喬太郎	サイトウ キョウ タロウ	東北工業大学		3年
	久保田 麻祐子	クボタ マユコ	東北工業大学		3年
	鈴木 花菜	スズキ カナ	東北工業大学		3年
	村上 皓海	ムラカミ コウミ	東北工業大学		2年
	石田 陽子	イシダ ヨウコ	東北工業大学		2年
	菅原 里南	スガワラ リナ	東北工業大学		2年
	佐々木 悠里	ササキユリ	東北工業大学		2年
	大村 琴里	オオムラ コトリ	東北工業大学		1年

研究グループ名：共同アトリエ調査 (CA) グループ

	氏名	フリガナ	所属機関等	所属部署等	役職 (身分)
○	佐々木 秀之	ササキ ヒデユ キ	宮城大学	事業構想学部	准教授
	菅原 香織	スガワラ カオリ	秋田公立美術 大学	美術学部	助教
	渡邊 博一	ワタナベ ヒロカ ズ	東北工業大学	大学院ライフデザイン学研究 科	研究支援CD

研究グループ名：生活景の保全醸成（LS）グループ

	氏名	フリガナ	所属機関等	所属部署等	役職 (身分)
○	竹内 泰	タケウチ ヤスシ	東北工業大学	工学研究科	准教授
	阿部 正	アベ タダシ	東北工業大学	大学院ライフデザイン学研究科	研究支援CD
	高橋 頼雄	タカハシ ヨリオ	東北工業大学	大学院ライフデザイン学研究科	研究支援CD
	伊藤諒佑	イトウ リョウスケ	東北工業大学	工学部建築学科	3年
	鈴木正樹	スズキ マサキ	東北工業大学	工学部建築学科	3年
	村山 早紀	ムラヤマ サキ	東北工業大学	工学部建築学科	3年

7. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

(現時点ではとくになし)

7-1. シンポジウム等

年月日	名称	場所	参加人数	概要

7-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

(1) 書籍、DVD

- ・ 「コアトリエ～未来に伝える東北の生業と生活景～」 Vol.1 2017春号, H29.3.24発行

(2) ウェブサイト及びSNSアカウント等構築・運営

- ・ サイト名、URL、立ち上げ年月、今年度の主な発信内容等
(公開用WEBは準備中)

(3) 学会(7-4. 参照)以外のシンポジウム等への招聘講演実施等

- ・ シンポジウム等の名称、演題、年月日、場所
(現在なし)

7-3. 論文発表

(1) 査読付き (0 件)

- 国内誌 (0 件)

・

(現在なし)

●国際誌（ 0 件）

・

（現在なし）

（2）査読なし（ 0 件）

・

（現在なし）

7-4. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）

（1）招待講演（国内会議 0 件、国際会議 0 件）

・

（現在なし）

（2）口頭発表（国内会議 0 件、国際会議 0 件）

・

（現在なし、現在3件応募中）

（3）ポスター発表（国内会議 0 件、国際会議 0 件）

・

（現在なし）

7-5. 新聞報道・投稿、受賞等

（1）新聞報道・投稿（ 0 件）

・

（現在なし、現在寄稿依頼に対し執筆中）

（2）受賞（ 0 件）

・

（現在なし）

（3）その他（ 0 件）

・

・

7-6. 知財出願

（1）国内出願（ 0 件）

- ・ 発明の名称、発明者、出願人、出願日、出願番号
（上記いずれも現在なし）